

「未来 わからないから面白い」、「遺言は書きません。精いっぱいのことをして死ぬ時は死ぬ」とあった。記事の中で色々語られているお話は、もう何うことが出来ない。

三月頃からコロナ禍で集まる事が出来ない。清紫会を取り仕切って下さる松井さん、東京歌会担当の小野澤さん、展景の皆さんにお会い出来なくて残念です。

貴重な思い出を残して下さい、外山先生に感謝申し上げます。

## 無二の会短信

◆二カ月分ずつのカレンダーも、あと一枚になった。あわただしく過ぎてしまったような気分で、こんどは冬ごもりの仕度。テレビを見ながらの日々は、移りゆく自然の秋から冬へ向かう景色や、かつての旅行で見た所など、なつかしく思い出している。齢を重ねて、悲喜交々の去来する思いを抱きながら、ささやかに詠み続けてきた歌も、時には出来なくなってくる。この度は展景が百号の佳節となり、お世話をしてくださる方々に感謝申し上げます。  
市川茂子

◆年齢から高齢者講習が求められ、そのあとに(運転)免許証の更新手続きがある。この講習の日時等はハガキで知らされた。内容には講義、適性検査のほか実車運転がある。ところでこのうちの実車にはそれぞれ懸念があり、前夜寝られなかったという(いわゆる)クラスメート(入院の大部屋並みの人数)になった小母さんもいたほどだ。数十年を軽のワゴン、それもマニュアル車しか運転してこなかったじぶんにも懸念があった。待っている日数分のストレスにもなっていた。事前の自動車学校(これが会場)への電話連絡(ここで、懸念を伝えておいた)で、実車車種がクラウン

コンフォート（オートマチック、教習車）だということにはわかった。当日、いつも左ハンドル車を運転している、などそれぞれの理由で、緊張していない人はいない。多くが小母さんで、心配から気安く互いに口を出してくる。じぶんは免許証返納までを覚悟した。ブジに終わっても有効期間はそれぞれ七十五歳までの年数になるという。じぶんは三年になるようだ。実車直前にも、こちらの事情を云って配慮を求めてみたが、このところオートマチックでの高齢者事故が多いところから、オートマチック車が促され、とくに今回、段差を踏み越えてすぐにブレーキを踏む、というのが必須になっていた。クランクや踏切などは含まれない。コース内はスピードを出すことがないので助手席の職員の指示でうごかすのみ。案外にクリアできた。助手席では採点をしていたようだが、これは参考点だという。これがこの秋の山場のひとつだった。終了証明書（更新手続きの条件）は、クラスみんながもらえることになった。

小野澤繁雄

◆少子高齢化が一段と進む我が町に、新しく診療所が開設されることになった。既存の病院が三カ所ほどあったが、医者そのものも高齢化が進み、聴診器を置いてしまったのだ。それで町で公設の診療所を建てて、医者を迎えることになった。聞くところによると尾花沢出身の女医さんのことである。開設までまだ時間があるが、町民の期待は大きい。

まるめるや「慕情」の如き女医来る

神村ふじを

◆「展景」一〇〇号、おめでとうございます。創刊以来、編集にご尽力いただき感謝しています。祝賀のごとく、未来誌の「未来広場 みらい・プラザ」に布宮慈子様のご九首の短歌が披露され掲載されました。誇りに思い、作歌に努めてまいります。是非「展景」で皆様にご紹介いただきたい。

コロナ禍の閉塞感の日々は目を空に向けてたくなりますが、曇り日の多い十月は晴天となれば、昼間は日光を活用して、洗濯に散歩に、夜は月や星を見て、パンデミックの行き場のない心情を晴らしています。千差万別のコロナ体験を表現者として後世に残すことも意義あるかもしれません。速い収束を願うばかりですが、お互いに体に気を付けましょう。

河村郁子

◆「展景」百号おめでとうございます。これも編集者の布宮・堀氏のご苦勞の賜です。一方で、私の筆が止まったのが七十六号で六年も過ぎてしまった。一念発起して次回より「近江気まぐれ文学抄」を再開したい。定年退職まで四年あまりである。

新関伸也

◆十月二十七日、山形県自然保護団体の総会があり、最上小国川ダムの報告があった。最上町が県に治山ダム建設を要望したのが一九八七年、それから三十三年後の今年八月完成した。漁協と市民団体は建設に問題があるとして二〇〇三年に反対を表明し運動を展開。しかし二〇一二年に工事が着手された。その年市民団体は県に差し止め訴訟を開始した。二〇一九年敗訴、翌月仙台高裁に訴

えたが棄却された。現在最高裁の審理を待っている。ダムの共用が始まっても市民団体は水質や河床の定点観測、アユの生態調査を精力的に継続している。全国的にもダム完成後のこのような調査をやっている団体はないらしい。遠くない日、ダム建設は失敗であったことが明るみに出るに違いない。ほとんどが団塊世代の皆さんの活躍に改めてエールを送りたい。

新野祐子

◆この夏は私にとってとんでもない夏であった。まず外山滋比古先生が亡くなられた。清紫会の名付け親で長年エッセイをご指導くださったあの外山先生が、である。毎年くださった年賀状を今年はいただけなかつたので、どうなさったかと思っていたが、ご病気とは知らなかつた。つぎに私ごとだが、私鉄の駅のホームで人にぶつかられて倒れ、脊椎せきついをニカ所骨折して入院・手術となつてしまった。頭を打たないだけよかつたと思っている。

末筆ながら、外山先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

松井淑子

◆多くの方の家を訪問していると、ごくたまに「仙人が住んでいるような家」に出会うことがある。週一回の掃除支援なのに、ほとんどホコリや汚れが見当たらない。一度、「ヘルパーが来ない日は、クイックルワイパーとかで掃除をされていますか」と問うと、「もう、面倒くさくて、本当に何もしていないの」と即答。言葉に嘘はなさそうだ。そうした仙人の家は、息子さんが週に一度

は必ず来てくれるなど、不思議と家族からの支援も手厚い。いつもニコニコと笑顔が多く、ヘルパーにはいつも感謝を口にし、労ってください。一人でも自分のペースで穏やかな時間を過ごしているのだろうと想像できる。ここまで書いて、ああ、やっぱり、半分ぐらいは仙人みたいになつているのだな、と納得した。

山内裕子